

矢島渚男著『虚子点描』紹介

上原 昇 (2組)

矢島渚男さんは本名を薫 (かおる) といって、丸子町出身、現在87歳、上田高校51期で名簿登録されています。ただ、ご本人から聞いた話では、事情があり2年生の時に、都立九段高校に転校しています。東大文学部国史学科を卒業後、長野県高校教諭になり、我々が在校中、母校で教鞭をとっていました。私も(国語ではなく)倫理社会の授業でお世話になりました。その当時、矢島さんは30歳くらいだと思いますが、俳句をする先生だとは全く知りませんでした。(同期で知っていた人はいたのでしょうか)

2012年(平成22)9月に母校創立110周年記念式典が上田で開催され、そこで、矢島先生の講演を聴く機会がありました。

最近、朝日新聞の俳句時評欄で矢島先生の新刊『虚子点描』(紅書房、22年1月刊)を知り、新宿の紀伊國屋書店に立ち寄った際に買い求めました。

本著では、高浜虚子の作品の中から164句を選んで著者独自の解説を行い、虚子が生きた時代も描いています。虚子は1944年から47年まで小諸町野岸に疎開しており、本著では、「小諸時代」と1章を設けているのも興味深いです。

私は俳句作りをしません、鑑賞するのは好きなので、虚子の句から、その背景や映像をイメージしながら読み進めることが出来ました。

特に印象に残ったのは以下の3句です。

- 《遠山に日の当りたる枯野かな》 1900年
- 《夏草に延びてからまる牛の舌》 1945年(小諸に疎開時)
- 《去年今年貫く棒の如きもの》 1950年

【矢島渚男先生】



(2022年5月1日記)



以上